



避難所で問題があると疑われるのは障害者。 けれど理解されることで偏見がなくなった。

障害福祉サービス事業所 くじらのしっぽ①

- ◎利用者：小川絢子さん(女性／当時29歳・知的障害)
- ◎管理者：阿部かよ子さん ◎職員：多田剛優さん
- ◎グループホーム くじらのしっぽ ひまわり 生活支援員：阿部安子さん



— くじらのしっぽがある清優館 —



— 利用者の小川さん —

避難所

高台にあった建物が避難所に。健常者と障害者の共生が始まる。

「くじらのしっぽ」は、牡鹿半島の高台に建つ保健福祉センター「清優館」の一角を事業所として使用しています。高台にあったため建物は津波の被害を免れ、利用者も職員も全員が無事を確認することができました。一方で海に近い地域は甚大な被害を受けたため、多くの被災者が高台に上ってきました。「清優館」は避難所として開放され、ピーク時には600名ほどの被災者が「清優館」に避難していました。

地震の当日から、職員も利用者も自宅の被災を案じながら、「くじらのしっぽ」で使っていた作業室で避難生活をするようになりました。海岸周辺から避難してきた方とは部屋を分けていたのですが、ある日、利用者さんにむけて心ない言葉が聞こえてきたのです。トイレが汚れていたり、ルールを守らないで使われていたりすると、利用者さんがしたのではないかと疑われてしまったのです。

職員はその言葉を受け、利用者さんに別棟作業所のトイレを使ってもらうことにしました。また、避難所運営のルールにしたがって、利用者さんとトイレの清掃等を行ったことも、誤解を解く大きな要因となりました。しばらくして、多くの被災者が利用者さんを受け入れるようになりました。救援物資の分配作業などを利用者さんと職員がペアで手伝うことで、障害のある人への偏見もどんどんなくなっていったのです。後日、この時避難していた方から「あの時はごめんね。あんたたちに最初に助けられたんだ」という言葉を聞くことができました。

活躍

被災者を受け入れる側として、利用者さんも職員も避難所運営の役割を担う。

避難する側ではなく、避難してきた人を受け入れる側となった「くじらのしっぽ」。いざという時のために、作業で作っていた食パンを冷凍庫いっぱい保管していたことが役立ちます。食パンやおかゆなどを避難してきた方に提供するなど、避難所運営に貢献することができました。

また、職員がより重度の利用者さんを抱えなければいけない状況の中、小川さんをはじめとする一部の利用者さんは、職員の声掛け等で手伝いを行うなど、夢中になって頑張ってくれました。極限の状況の中、みんながそれぞれの役割を必死で担っていたのです。

課題

一番怖いのは誤解されること。互いを知ることによって力を合わせることができる。

職員の方々は避難所生活を振り返り、地域の人に助けられた一方で、地域の人々が障害者のことを知らないことが一番怖いと考えています。「今回(震災を)経験して、共生型と言ったら大きくなってしまいますけど、健常者も障害者も、老人も子どもも、一緒に過ごす体験をしないと、いざという時に大変」と話す管理者の阿部かよ子さん。お互いを知り関係を築くことが、当たり前になることを望んでいます。